くのである。

以上のように、太宗の頃の仏教界は実はさほどに国の恩を被ったわけではなく、或は帝室の個人的信仰対象として利を得た寺もあったにせよ、国家政策全体から見ると、反って統制を受けたという傾向が大きいように思われる。もっとも、太宗の代に於ては、後世のきびしい統制にはほど遠いものであって、その治も半ばとなってやっと宗教界の腐敗ぶりに気づいた太宗が、政治的粛清策をぼつぼつ加え始めることにしたというのが実情であったであろう。

定散通摂の三心の意義について

秦　治　人

「観経」定散二善十六観の展開の中で、定善観法が韋提希の請求に応じて説かれたのち、散善の上品上生が新めて自開されるについて、「上品上生者、若有衆生、願生彼国者、発三種心、即便往生。何等為三。一者至誠心、二者深心、三者廻向発願心。具三心者、必生彼国」とて「三心」が先ず願生者の発すべき根本条件として述べられている。これは如何なる意味を示すのか。

この意味について特に善導及び宗祖の観経理解の上から定善観門との関連、宗教的連続性等の方向より問うてみる。「観経」はもともと苦悩の凡夫、業縁に悩む韋提希夫人の教我観於清浄業処、或いはその方法たる観見の思惟と正受の道を請求することに於いて、それに答えんと宗教的救済の観法が説かれることに始まり、やがて観想観門の展開から必然的流れであるかの如く散善が自開され、そこに定散二善・三福が摂められているのである。善導に限らず、それ以前より、多くの聖道門の諸師達が観経疏を造りそれぞれの立場より観経精神について論ずるものが「観経」であるが、真に浄土教的精神を「観経」の中に見出したのは善導であるといわねばならない。従って又、浄土教的伝統に於ける善導の観経解釈は、仏教に於ける浄土教的人間観、否人間の宗教的根源の姿を我々に開示せしめるものであると考えねばならない。善導に依って明らかにされた観経とは単に浄土教的人間の実存を開明するのでなく、末法・五濁の人間そのものの宗教的実存をそこに説き示し、我々の人間の源初的在り方と救済の論理をうなづかしめるものである。即ち業縁存在の人間の在り方と宗教的苦悩及び救済が、正に観経に説き明かされるところの内容と言わねばならない。業苦の中に悲求された浄土観見願生の道、そして釈迦自問自徴より説示されたる三心往生の散善の行門、更には常に定散諸機の宗教的願行のうちに響いてくる如来弘願の大悲心の叫びたる如来招喚の南無阿弥陀仏、かかる願生的定散門と弘願の大悲心の呼びかけが交響する世界が観経であるといえよう。それは正しく善導によって「観経」とは「観仏三昧を以て宗と為す、又念仏三昧を以て宗と為す。一心に廻願して浄土に往生するを体と為す」とおさえられることであり、釈迦は韋提の請によって広く浄土の要門を開きつつ、必然的に又「安楽の能人別意之弘願を顕彰す」と明らかにせられる所以である。釈迦は韋提希に息慮凝心の

観法を思惟正受せしめつつ、具三心の必生彼国の散善行門をも説示したもうという宗教的行の開顕を為しつつ、宗教的心の自ずからなる観知をさとられたのである。即ち定散諸機各別のうちに発されるところの宗教的行を定散の方便門を働きとして弘願の真実信心へと帰入せしめずにはおかない、そういう宗教的実存の展開する方便真実の世界こそ観経世界であろう。

善導によって顕揚せられたる観経精神は、従って又宗祖の顕彰隠密の義によって一層我々自身の了解を明確にせしむるものでなければならない。

「釈家之意に依りて、『無量寿仏観経』を按ずれば、顕彰隠密の義有り。「顕」と言ふは、即ち定散諸善を顕し、三輩・三心を開く。然るに二善・三福は報土の真因に非ず。諸機の三心は、自利各別にして、利他の一心に非ず。如来の異の方便、忻慕浄土の善根なり。是は此の経之意なり、即ち是れ「顕」の善なり。「彰」と言ふは、如来の弘願を彰し、利他通入の一心を演暢す。」

宗祖は善導の三心釈を依り所としつつこの三心釈の顕わさんとしている深義をより明らかに領解せしめんために『大経』の三心と『観経』の三心の一異云向を問い発し、顕説の至誠心、深心、廻向発双心は行者の自力願生の心より発されねばならない自利各別の心と結釈し、又この顕の義そのものが同時に、如来の大悲方便が弘願真実を了知せしめて利他通入の一心を獲得成就せしめようとする隠義と予想対照し合うものであると了解されたのである。

従って顕説の如く三心必具を以て往生を願うとも、願生行者に発される自利各別の心はその散善の行そのものも自己矛盾を内に隠したものであり「散心行じ難し、廃悪修善の故に」と示されるもので、同時にそれは、散善以前に説き示された定善観法といえど「定心修し難し、息慮凝心の故に」と言わねばならないのである。確かに定善十三観に於いて説かれきたった、思惟正受の観仏三昧・念仏三昧は、観見成就をもって浄土願生の道であった。即ち浄土の正依等の事相を観想せしめつつ、やがて念仏三昧正受のうちに如来の大悲心が観知せしめられるという、念仏衆生摂不捨の観見の世界が顕わされたのであった。特に華座観より像観、そして真仏観のうちに、真実報土の如来願心浄土が韋提希のうちに説き示されたのである。然しそこに忘れてはならぬことは、「汝は是れ凡夫なり、心想羸劣にして未だ天眼を得ざれば、遠く見ること能はず。諸仏如来に異の方便有り、汝をして見ることを得しむ」と戒めつつ、仏力異方便としての観の成就が説かれたということである。しかもこの観の法門を通して常に呼びかけ、覚らしめられることは、浄土が、疑蓋無雑の如来の真実心、無漏の願心より荘厳されている真実功徳の世界であるということである。かかる真実功徳、無漏清浄の願心荘厳なることの了知のうちより、凡夫の自力の雑毒の善行一切が虚仮であり、真の宗教的救済としては自心のうちより加えられたる観そのものが自己矛盾であるということである。虚仮不実、雑毒の善根を以ては又観門そのものも閉されていると知らしめられる。

かくて如何に観見するかでなく、如何にして真実心を得て、真実功徳の浄土往生の行は為されねばならないかという問が自ずか

ら要請されねばならない。即ち往生の正因としての真実願心が示されねばならぬのである。三心の一者至誠心・二者深心・三者廻向発双心を仏自問自徴されるとはいえ、そのことは韋提希の内奥より未来世の一切衆生の問を自然に開き当てられたということであろう。韋提希自らは開き当てることのなかった一切衆生の往生の正因を自問自徴の一点に凝集して説きしめさんとする、そのことこそ人間の現実とその宗教的行の内実が我々の眼前に如実に覚知せしめるものである。自力的宗教心の働く現実がまさに散善・三心の展開を通して明了に説き示されるのである。

善導はこの三心は散善の行に必具されることによって往生の正因たるに止まらず、亦定善之義を通摂すと言って三心の正因たる所以を「散善義」の主要テーマとして展開しているのである。

『四分律行事鈔』における説法軌儀

大沢伸雄

(Ⅰ) 唐の道宣の行事鈔を中心として、在家者に対する授戒の問題について口頭で報告したが、過日『仏教学セミナー』第24号にまとめて上梓したので、ここでは授戒と関連の深い説法教化の方規について検討しておくことにする。行事鈔の「導俗化方篇」は、㈠説法の模範を示し、それによって在家者が仏道に入らんとするならば、在家信者とするための授戒の方法を明らかにする。㈡出家者が自らの生まれた縁、育てられた縁に連なる人々（父母等）に対する奉敬の仕方を明らかにする。㈢在家信者が寺に参拝するときの作法について教導すべき要項を明らかにする。以上の三点であるが、㈠において在家戒の授受を説く以前に、説法の儀式を説いているのでここでまとめておきたいと思う。

(Ⅱ) 仏教を一般在家者に教化する場合、結果的には相手の受け取り方次第である。もちろん出家者が正しい教法に依止して教化すべきであるが、いくら普遍的で絶対的な仏教の真理であるとしても、それは抽象的で一般的な行為においてでなく、具体的で個別的な現実の中において教化されるものであり、受け取られるものである。在家者に対する教導の仕方が思いつきであったり場あたり的であれば、逆に非法を起こすことがある。善見律を引用して「随二逐悪一者皆由レ無レ知、妄解二仏教一誹二謗如来一、作二諸悪業一広生二邪見一」のであるから、あらかじめ、正しい教化の方法、対し方を認識しておくべきである。「皆由下自無二方寸一師レ心結レ法」ことなく、仏説の経律において既に指摘されているのであるから、その点を明らかにして、実行しなければならないと言うのである。そこで十四項目（項目の標題は元照の科文による）にわたって述べているので、各々について要約してみることにする。

(1) 勧レ護受レ施——布施などによって仏法の護持を勧めるべきであるが、破戒の比丘は説法をしても信施を受けるべきではない（大集経）。

(2) 諸説是非——檀越に契経や分別の義を説いてもよいが、具さに文句を説くことはあってはならない。また二人の比丘が同一の高座に登ってはならない。歌詠声をもって法を説いてはならな